

# 伊勢物語の世界

土屋 博

文語の苑、「新生茶苑」を定例勉強會として新たに開催することと相成り候。洵に悦ばしき哉。顧みるに抑々文語の苑の「茶苑」はお茶の水女子大學を開催場所として対象を現役學生中心として發足せり。(藤原正彦教授のご盡力の賜なり。)その後、愛甲名誉會長の發意により文語の苑役員クラスを対象としたる「復活茶苑」を田園調布、その後更に場所を替へて櫻神宮にて再開したるも、コロナ禍の時代となり、講師陣の高齡化といふ已むを得ざる事情もあり、遂に休眠状態となりたるは痛恨の極みなりき。今回の「新生茶苑」の講師役は高田友主任研究員なり。氏の講義の面白さについてはJ.Rの教室などにてつとに定評のある処なれば、大いに愉しみと致したる処なり。

今回のテキストは伊勢物語なり。六月二十七日の第一回目には、初段「うひかうぶり」、二段「西の京の女」、三段「ひじきも」、四段「西の對に住む人」、五段「二条の後」を學べり。

小生も「伊勢物語」につき若干の自宅學習をば試みたり。「教程日本文學小史」(中等學科教授法研究會、明治三十一年刊)によらば、伊勢物語については、「在原業平の作なりといふ。その文章簡勁、歌姿秀逸なり」とあり。また、國文學習の必須書「落合直文 國文評釋」(明治二十五年刊)には伊勢物語より「小野の深雪」、収録せらる。業平の作として扱はれ、「三十一字は業平の惟喬親王に對し奉れる精神見えてあはれいとふかし。ことに親王大殿籠らで明し給ひてけりの一句にいたりては讀者をしておぼえず袖をしぼらしむ」との評釋あり。

以下、関連参考文献などを記す。

一「特別展 伊勢物語の世界 展覧会目録」

(五島美術館、平成六年十月刊、二〇三頁)  
古書價格三百圓也。

## 第一章伊勢物語の成立

伊勢物語の中核部分は在原業平(八二五年生れ、八八〇年歿)自身これを著したること定説にて、凡そ百年の年月を掛けて増補せられ、百二十五段となりたる由。「源氏物語」の總角(あげまき)の巻には「在五が物語」、「狭衣物語」には「在五中将の日記」と書かる。

## 第二章伊勢物語の寫本

最も古きものは藤原公任(九六六年生れ、一〇四一年歿)筆によるもの。

## 第三章伊勢物語の註釋書

定家の孫の二条為氏（一二二二年生れ、一二八六年歿）筆の「伊勢物語知頭抄」あり。また、在原業平次男滋春の書と傳はる秘傳書「伊勢物語髓脳」などもあり。

#### 第四章伊勢物語の美術

現存する最も古きものは「白描伊勢物語繪」（梵字經刷）なり。（白描とは墨線のみにて描きたる繪畫）江戸時代初期「伊勢物語圖色紙」は俵屋宗達（一六四〇年頃歿）の制作なり。尾形光琳（一六五八年生れ、一七一六年歿）の筆になる「伊勢物語圖」の魅力は格別なり。光琳作には「業平蒔繪硯箱」、「八橋蒔繪螺鈿硯箱」てふ工藝品もあり。

#### 第五章伊勢物語の展開

江戸時代中期の畫家土佐光芳の繪、裏松意光（これみつ）の詞による「奈良繪本伊勢物語」は色鮮やかなる冊子本なり。



#### 二 「CD二枚組 伊勢物語」

（NHKサービスセンター）

講師神野藤（かんのとう）昭夫跡見女子大教授。原文朗讀は加賀美幸子。第一段初冠、第四段春や昔の、第二十三段筒井筒、第八十三段小野の雪などを収録す。

#### 三 「伊勢物語上下 全譯註」阿部俊子著

（講談社學術文庫、一九九五年二十版）

阿部俊子は明治四十五年生れ、一九九三年歿。東京女子高等師範卒業後、東京文理科大學國文科卒。配偶者は源氏物語の研究者、東大名誉教授阿部秋生なり。初版は一九七九年なり。

#### 四 「新潮日本古典集成 伊勢物語」渡邊實校注

（新潮社、昭和五十一年刊、定價千三百圓、二六九頁）

古書價格二百圓也。函入。

#### 五 「日本英雄傳」

（非凡閣、昭和十一年刊）

在原業平の箇所を見るに、小野の里のわび住居に惟喬親王を訪ねたる際の「忘れては夢か  
とぞ思ふ思ひきや 雪ふみわけて君を見んとは」及び「思ふこと云はでぞただに止みぬべ

き われにひとしき人しなければ」を引き、激情家としての一面を強調せり。有名なる東下りは、「二条の后入内を妨げたること露見し、髪の毛をぶつりと切られ、恰好は悪し、世間の口煩いといふので、髪の毛の延びるまでと思ひ東北地方へ旅に出た」ものなる由。

六「日本の書物」紀田順一郎著

(新潮社、昭和五十一年刊)

伊勢物語の箇所には夫婦仲良く伊勢物語の古書を蒐集し続け、後醍醐天皇宸筆寫本を含む日本一の伊勢物語のコレクション「鐵心齋文庫」を完成させたる芦沢新二夫妻の感動的美談も掲載せらる。

(令和四年七月十二日受附)